

談話分析理論とコミュニケーション理論の接点

津 田 早 苗

Contributions of Discourse Analysis to the theory of Interpersonal Communication

Sanae Tsuda

ブラウンとユール Brown and Yule (1983) の指摘するように、談話分析 Discourse Analysis の理論は社会言語学、心理言語学、言語哲学、コンピューター言語学などの広範な分野を包含している。彼等の説明によれば談話分析によって、社会言語学者は会話にあらわれる社会階層の相違を明らかにしようとし、心理言語学者は文の理解の過程を分析しようとし、言語哲学者や理論言語学者はある文の統語構造とその意味の関係を明らかにしようとし、コンピューター言語学者は談話の解釈のモデルを構築しようとしているのである。(Brown and Yule : viii)

一方において、個人間のコミュニケーション理論は談話分析を主とする言語学の分野と密接に関連しているが、それ以外に、社会学、心理学、情報理論などに関連した学際的な学問分野である。この小論の目的は、談話分析理論が、どのような点において個人間のコミュニケーション理論に貢献したかを明らかにすることである。以下において、個人間のコミュニケーション理論との関連において言語学的談話分析、哲学的語用論的談話分析、さらに社会言語学的談話分析を考察する。(コミュニケーション理論と以下に述べるのは個人間のコミュニケーションを意味する。)

I. 言語学的談話分析理論

1. 文から発話へ

理論言語学は外界の物、あるいは抽象的概念(指示物)の記号化としての言語を対象とし、そのような言語の音韻組織、統語組織、意味組織がどのような規則体系をもっているかを解明することを目的とする。そのためには、言語を抽象的な対象として分析する必要があり、通常の状態から切り離された文、又は、それ以下の単位が分析の対象となる。

これに対し、社会言語学、語用論、談話分析などは使用される状況における言語の持つ規則性を明らかにすることを目的にし、言語が社会組織や対人関係において如何に使われるか、ま

たは、話し手の意図が、どのように聞き手に理解されるかを記述する。実際に使用される言語を記述するためには、分析の対象となる言語は単独の文では十分ではなく、前後の文脈を含む文より大きな単位、談話 discourse が適当であると考えられる。このような点から談話分析が必要とされるのである。

言語を言語が使用される状況から切り離して分析することは、不可能だと主張するハリデー Halliday は文をその機能によって分析した (Halliday 1976)。彼のような機能文法家達の分析によって、文より大きな単位である談話を設定することにより、文を越えた照応関係、テキストの一貫性、結束関係などを分析することが可能になった (Halliday 1976)。これらの分析は言語学の立場からは文を越えた単位の分析を可能にした点で、大きな変革であるがコミュニケーションの立場からは、照応、結束、一貫性などの分析は言語の構造の分析であり、更に意味の分野に踏み込んだ分析が必要であることは明らかである。

対人コミュニケーションにおける言語の分析においては、当然発話の前後の状況、話し手と相手の社会における地位の差等が考慮されなければならないので、分析の単位は文ではなく、談話の単位でなければならない。次の項でふれる談話のはたす機能に関する談話の単位の設定に関して、分析者により基本的単位の定義や述語は、発話行為 (speech act)、発話 (utterance)、ムーブ (move) などであるとされ (Coulthard : 8) 一致した見解は見られないが、文より大きな単位が必要であるという点で一致している。これらの単位は、社会言語学、または語用論の理論から発展した談話分析の単位であり、コミュニケーション理論における言語の分析には、言語学的談話分析よりも妥当であるといえる。

2. 文の構造よりも機能へ

前節で述べたように、談話分析の目的は文法的な文の構造の記述ではなく、様々な状況や対人関係における言語使用の実体の記述である。従って、文の果たす役割つまり機能の記述が重要になる。大きく分けて文の機能には、情報伝達の働きと社会的な機能や個人の態度を示す働きがあるが、それらをブラウンとユールは transactional と interactional (Brown and Yule : 1) と呼んでいる。個人間コミュニケーション理論においてしばしば取り上げられるのは、言語の情報伝達の面よりも後者の言語の社会的機能である。まず、談話分析において情報がどのように扱われるかをみる。

文の情報に注目し、それがどのように文の形態に影響するかを分析したのも、ハリデーである。文を情報を伝える機能の観点から分析する時、情報が聞き手にとって新しい時には情報の価値が高く、お互いにある情報を共有しているときにはその部分の情動的な価値は低いと考える。新情報は通常、文の主題 theme として文頭におかれ、旧情報は、文の題述 rheme として後部におかれることが多いとハリデーは指摘して、次のような例を挙げている。それぞれの文の示す情報は同じだが、相手に何を主体に伝えたいかによって文の形が能動態、受動態、等に

かわることがわかる。新情報、旧情報という概念は言語学を基盤とした談話分析において、談話における指示関係の分析、トピックの分析などの重要な分析の手掛かりとなっている。指示関係は談話構造の結束関係に重要な働きをすることは前に述べたとおりである。

the duke	has given my aunt that teapot.
my aunt	has been given that teapot by the duke.
that teapot	the duke has given to my aunt.
theme	rheme

(Halliday 1985 : 38)

談話文法は、文の文法から一步進んで、文よりも大きな単位談話を設定し、それによって文を越える照応関係などを扱うことが出来るようになった。しかし、レビンソン Levinson (1983) が指摘しているように、このような分析は基本的には文の文法の方法を談話の分析に応用したに過ぎない。(Levinson : 286) コミュニケーション理論においても、主題の概念は重要であるが、社会言語学的な観点による会話における話題との関連においてとらえたほうがより妥当であろう。談話の意味について理論的に大きな貢献をしたのは、オースティンなどの哲学者である。談話の意味と機能との関連に関して次に考察する。

II. 哲学的語用論的談話分析理論

1. スピーチアクト理論

オースティン J. L. Austin (1962) は彼のスピーチアクト理論において、言語は情報を伝える働きをするのみならず、ある言語表現は言語そのものが行動をあらわすことを指摘した。例えば次のような文がそれにあたる。

I hereby pronounce you man and wife.

これは牧師が結婚式の時に述べることばで、このことばによって二人は夫婦となるのである。オースティンはこのような表現の持つ特別の機能を発話内行為と呼ぶ。彼の発話内行為の分析は生成意味論者によって更に発展し、命令文、依頼文などの意味と統語構造との関係がより詳細に研究された。そして、生成意味論の研究の成果は現在は語用論の研究に継承されている。

(Levinson : 372)

スピーチアクトの種類がいくつあるかについて言語哲学者は一致した見解には至らなかったが、サール Searle は5つ程度だと考えている (Coulthard : 25)。彼はスピーチアクト理論をさらに言語使用の面に即して構築し、スピーチアクトが聞き手にどのように受け取られるかに注

目し、相手に命令するときどの程度相手に直接または間接的に意向を伝えるかによって命令文を6つ段階に分類した。

1. Sentences concerning hearer's ability; Can you pass the salt ?
2. Sentences concerning hearer's future action; Will you
Are you going to } pass the salt ?
3. Sentences concerning speaker's wish or want; I would like (you to pass) the salt.
4. Sentences concerning hearer's desire or willingness; Would you mind passing the salt ?
5. Sentences concerning reasons for action; It might help if you passed the salt.
I don't think you salted the potatoes.
6. Sentences embedding either one of the
above or an explicit performative; Can I ask you to pass the salt ?
(therefore not really a separate class)

(Coulthard: 25-26)

発話が聞き手にどのように解釈されるかに注目したサールの間接的発話行為 indirect speech acts の理論は、次に述べるグライス Grice (1975, 1978) の会話の含意の理論と共にコミュニケーションの基本的問題を提供しているといえる。

2. 会話の含意

我々は日常言いにくいことを婉曲に表現し、相手がそれを理解して欲しいと思っている。哲学者グライスはこのような間接的な表現を会話の含意と呼び、なぜ人々がお互いに理解しあえるかについて考え、人々は相手の話を何とかして意味あるものとして解釈しようとしていると考えた。彼はそれを「会話の協調の原理」と呼び、この原理とそれを補う公理によって人々は理解しあっていると主張した。彼の原理と公理は以下のように要約できる。

協調の原理「あなたの加わっている会話に対して、その発話時点で、会話の目的や方向に沿うよう、貢献しなさい」……

量の公理：必要とされているだけの情報の量を伝え、それ以上でもそれ以下であってもならない。

質の公理：間違っていると思われることや証拠を欠くようなことを述べてはならない。

関係の公理：目下の話題にかかわりのあることを述べなさい。

様態の公理：明確，簡潔，秩序立てて話しなさい。

(ユール：157-158)

彼の協調の原理によって人が一見脈絡の無い会話をなぜ理解するのかを説明できる。

母：「今日はカレーにする？」

子：「お父さん帰ってこないの？」

これは、家庭における母と子の会話だが、一見脈絡のない会話だが子供は、母親が手軽に出来、かつ子供の喜ぶ献立を提案したことから、父親が夕食に帰らないことを推測しているのである。われわれは無意識のうちにこのような含意のある会話を解釈し、理解しあっているのである。会話の含意の理論は、コミュニケーションにとって大変重要であり、次に述べる話し手と聞き手の社会的な関係を考慮に入れることによって、言語によるコミュニケーションにおける中心的な問題である相互理解の問題を扱う枠組みを与えているといえる。

Ⅲ. 社会言語学的談話分析とコミュニケーション理論

1. 話題と談話分析

言語学的談話分析においては、話題 theme は文の構造の決定、照応関係で大きな役割を果たしている。社会言語学的談話分析において問題となるのは、談話のトピック topic である。トピックは談話の継続の理由になると同時に、だれが話題を設定するか、どこで話題を変えるか、どこで話を終わるかなど、だれが会話の主導権を持っているかの対人関係を反映する。それぞれの言語には、話題設定や話題変更をするための特別の表現がある。日本語では、「ところで、…についてですが…」 「そろそろ、本題に入ろうと思いますが…」 「話は替わりますが…」 等がそれにあたるであろう。また、会議における説得、議決などのコミュニケーションの問題もトピックと談話分析の分野と深く関係している。

2. 談話の機能による分析

社会言語学的談話分析は談話の果たす機能や、談話にあらわれた対人関係に注目するので、哲学的談話分析の対象であるスピーチアクトや会話の含意に深い関係を持っている。社会言語

学的談話分析は会話分析とも呼ばれ、談話または会話がどのような社会的対人関係を反映しているかに注目する。また、社会における言語使用の現実を反映しているという点で、社会言語学的談話分析はコミュニケーションの分野とも密接に関連しているといえる。

哲学的談話分析の理論的背景にあるスピーチアクト理論は、依頼、質問、拒否等の言語の機能に対する興味を呼び起こしたといえる。社会言語学的談話分析の分野では、実際の会話をデータとして談話がどのような構造を持っているかが研究されている。データとしては、電話の会話、医師と患者の会話、教室における教師と生徒の会話などが選ばれている。医師と患者、教師と生徒の会話の分析は立場の上下のある人々の間の会話の分析である。医師又は教師は常に相手に質問する立場にあり、患者や生徒は答える義務があり、彼らが質問できることは限られている。教室の中では、教師は自分は答えを知っているのに相手に質問するという点で通常の質問と異なっていることが指摘されている。

それぞれに共通する会話の特徴としては、会話の順番とり（ターンテイクング）が、挙げられる。会話の話者が交代するときどのような表現が使われるか、交代を避けるときにはどのような手段が使われるかなどが考察されている。また、データの会話の中でだれが権威を持っているかに注目し、グループの中の上下関係を明らかにしようとする。例えば、相手に順番を譲らないようにするには、ポーズの部分をなくすようにしたり、イントネーションを上げてまだ終わっていないことを相手に示したりする。

また、異文化間コミュニケーションの問題として考えれば、文化による会話の順番とりの手順の違いを比較することが出来る。たとえば、アメリカに留学した日本の留学生は教室のディスカッションに加われず、指導教員の高い評価を得ることも出来ないのが普通だが、会話の中に加わるためのいくつかの表現を習得することによって、自分の順番をとることが出来るようになり、授業参加もスムーズに行なわれるようになるなどの例があげられる。(Yukawa and Yatsushiro : 9) これは、社会言語学的談話分析が異文化間コミュニケーションの問題と関連している例である。

談話のデータに見られるもう一つの特徴は、談話分析研究者たちに隣接ペアーと呼ばれているもので、ある表現はある特定の反応を引き起こすことが観察されている。質問には答え、挨拶には挨拶、依頼にはその答え、終わりの合図にはそれに対する応答というように会話は、ある表現が次の表現を引き起こすことによって続いていくことが指摘されている。ある学者は、隣接ペアーではなく「始まり」「応答」「フィードバック」の3つの部分からなると主張している。(Stubbs : 83) 隣接ペアーの考えは言語教育においてはある状況における決まり文句として状況に応じた表現を学習者に教える時に利用され、一定の効果を挙げているといえる。

3. 敬語と婉曲表現

グライスの会話の含意の分析に関連して、なぜわれわれは会話の相手にはっきりと意志を伝

えないのかに関する問題が社会言語学的談話分析では大きな問題となっている。相手がはっきりいわないときにも、協調の原理とそれを補う原理により我々は相手を理解するように努めることは、哲学的談話分析の項で考察したが、なぜ我々が、婉曲表現をするのかにはふれなかった。

この問題を扱ったのは、社会学者のゴフマン E. Goffman であり、彼は婉曲表現、敬語の問題を人の持つフェイス face (体面) の問題であると考えた。人はすべてフェイスを持ち、それが傷つくことを望まず、又、通常は相手の体面も傷つけることを望まないものである。ゴフマンはフェイスを守る方法には、相手と親しくなることによって体面を保つ積極的な方法 positive face と、相手と隔たりを作ることによって体面を保つ消極的な方法 negative face があると分析する (Brown and Levinson : 68-71)。

ゴフマンのフェイスの理論を敬語の表現の分析に利用したのは、ブラウンとレビンソン Brown and Levinson であるが、彼らは談話において相手と距離を保つ時には、人は婉曲表現や敬語を使って相手との距離を保ち、お互いの体面を保ち、反対に、相手に親しさを示したい時には、直接的な表現を使うとしている。

これを会話のスタイルの理論として組み立てたのが、タネン D. Tannen 1986 である。彼女は社会における会話の行き違いの原因の多くが、会話のスタイルの違いから発していると主張する。会話のスタイルは個人によって異なるが、男性と女性、異なる地域、文化によっても異なるので会話のスタイルの違いは異文化間コミュニケーションの問題でもある。彼女は会話の機能をメッセージとメタメッセージに分類する。メッセージは、会話の情報の部分を指し、メタメッセージは、相手との関係を伝える役目をする。我々は会話をするときに何を言うかと同時に、常に相手と自分の関係を考えて、どのように言うかに気を遣って暮らしている。相手が自分より目上であれば敬語を使ったり、あまり親しくない人であれば、距離をおいた話し方を心掛けるであろう。

特にタネンの会話のスタイルが、コミュニケーションの理論としても優れているのはメッセージとメタメッセージの理論が、コミュニケーションの行き違い、つまり、誤解のメカニズムを説明できる点にある。タネンによれば、人はメッセージに反応するタイプの人とメタメッセージに反応するタイプの人がいるという。男女の差からいうと男性はどちらかと言えばメッセージを重要視し、女性はメタメッセージを重要視するという。

例えば、休日の過ごし方を夫婦で相談するとすると、もし妻が夫が疲れているからと気を使い買い物に行きたいのを遠慮して「お疲れでしょう。今日は家でんびりしましょうか」と言ったとする。それに対し、夫は妻が本当に家に居てもよいと言っていると解釈し「ああ、そうしよう」といったとする。妻は、夫が「久しぶりの休みだ。二人で買い物に行こうか」と言うこと期待しているのに、がっかりするというようなコミュニケーションの行き違いである。妻は夫のことを思いやったので、夫も同様に妻のことを思いやるだろうと期待するが、夫は夫婦なのだから、自分の希望をはっきり述べるのが当たり前だと考えているのである。

タネンは男女に関わらず、人は独立した人格でありたいという気持ちと他の人と関わりたいという二つの相反する欲求を持っているという。我々はある意味では皆同じで、だれとでも理解しあえると同時に、それぞれの人は異なっていて理解しがたいのである。(Tannen:17) 彼女は、独立を尊重する人はメッセージに注目しがちで、他の人との関わりを重要視する人はメタメッセージを重要視するので、ミスコミュニケーションの問題が生ずると説明しているのである。

4. 権力と仲間意識

タネンはメッセージとメタメッセージとの関係は、独立と関わりとの関係であると同時に、権力と仲間意識との関係でもあると指摘している。独立は他の人と距離を保つことを意味し、仲間意識とは異なり、他の人と異なった位置に立つことを意味し、仲間意識は他の人と同じ位置に立つことを意味する。メッセージを中心とした談話は会話によって相手をコントロールする権力のあらわれであるとも解釈できる。これに対し、メタメッセージを中心にした会話は、相手と気持ちを通い合わせるための会話であり、メッセージの中身はあまり問題にされないとと言える。タネンが指摘しているのは、このような独立と関わり、権力と仲間意識の対立概念は、一つの会話における異なる側面であるに過ぎず、どちらにも取れるので誤解が生ずるのである。メタメッセージは、グライスの会話の含意の概念と共通しており、話し手の意図を聞き手が常に正しく解釈する保証はないのである。

談話の持つ機能の特徴を分析する談話分析の研究は、コミュニケーションの研究でもある。異文化間コミュニケーションの分野では、相手と対立することを好まない日本人が「ノー」と言わずに相手に否定の意志を伝えるのにどのような婉曲的な方法を用いるかの研究等があげられる。

IV. 談話分析とコミュニケーション…まとめ

会話が持つコミュニケーション機能を明らかにするために、談話分析がコミュニケーション理論にどのような点で貢献したかを考察してきた。言語学的談話分析の代表としては、機能文法が考えられるが、これは分析の対象を文以上の単位まで拡張した点で、コミュニケーションと関連すると考えられるが、研究対象が照応、結束、一貫性など文の文法の延長線に考えられるもので直接はコミュニケーション理論とは結びつかないと考えられる。

これに対し、哲学的語用論的談話分析は談話の意味を考察する理論的基礎を築いた点で、談話分析、ひいては、言語によるコミュニケーションの理論の基礎となっていると考えられる。発話の機能の概念の導入をしたスピーチアクト理論と、会話の情報伝達の機能と他人との関係をあらわす待遇表現の区別をし、文の統語的意味のみならず会話の対人的意味を分析する社会

言語学的談話分析は会話分析の理論的基礎となっていると言える。語用論、談話分析の研究をコミュニケーション理論との関係において考察し、比較研究してきたが、言語が個人間のコミュニケーションにおいて果たしている役割は、ほんの一部分しか解明されていないのが現状である。

社会言語学的談話分析は会話分析とも呼ばれるとおり、会話の分析によって社会における言語使用の実体を記述することを目的とする。この小論で考察したように、この分野の研究にはコミュニケーションの研究と見做されるような研究も見られ、コミュニケーション理論と社会言語学的談話分析の密接な関係が指摘出来る。コミュニケーションはボディランゲージなどの非言語伝達等の重要な分野も包含する学際的な分野であるので、談話分析によって明らかになるコミュニケーションの実体は限られているが、重要な位置を占めていることは確かであろう。

参考文献

- Austin, J. L. *How to Do Things With Words*. 1962. Edited by J. O. Urmson. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, Gillian and George Yule. *Discourse Analysis*. 1983. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. 1978. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coulthard, Malcolm. *An Introduction to Discourse Analysis*. 1977. London: Longman.
- Gumperz, John J. *Discourse Strategies*. 1982. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K. *An Introduction to Functional Grammar*. 1985. Baltimore: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Ruquiya Hasan. *Cohesion in English*. 1976. London: Longman.
- Levinson, Stephen C. *Pragmatics*. 1983. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. "What is a Speech Act?" *The Philosophy of Language*. 1971. Oxford: Oxford University Press
- Stubbs, Michael. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. 1983. Oxford: Basil Blackwell.
- Tannen, Deborah. *That's Not What I Meant!: How Conversational Style Makes or Breaks Relationships*. 1986. New York: Ballantine.
- Tannen, Deborah. *Talking Voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. 1989. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wardhaugh, Ronald. *An Introduction to Sociolinguistics*. Second edition. 1992. Oxford: Basil Blackwell.
- Wardhaugh, Ronald. *How Conversation Works*. 1985. Oxford: Basil Blackwell.
- Yukawa, Emiko and Christine Yatsuhiro, *Developing Intercultural Skills*. 1988. Kinseido.